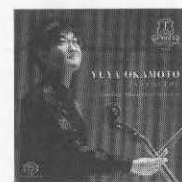


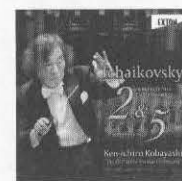
近藤憲一



②岡本侑也 IN CONCERT
岡本侑也(vc)
[高崎芸術劇場 T-shot OV
CX00089] CD & SACD+
DVD-V



①無伴奏フルートの世界
～バンの笛 400 年の旅～
有田正広(fl)
[デンオン COCQ8552
8]



④チャイコフスキー：交響曲第2番《小ロシア》、同第5番
小林研一郎指揮日本 po
[EXTON OVCL00755 (2枚組)]



③ Danzón
原田慶太楼指揮 NHKso
[デンオン COCQ8552
7]

①トラヴェルソの名人・有田正
広の『ハンの笛400年の旅』

現代日本にはフルートの大名人が2人いる。工藤重典と有田正広だ。ともに1970年代終わり頃から演奏活動を始め、その名を世界に轟かせて40年以上を誇るが、工藤がモダン・フルートを駆つて、現代の前衛的な作品の開発・紹介にも努めたのに対し、有田は大学時代からビリオド楽器のフラウト・トラヴェルソを究めるべく、当時そのジャンルの先達（バルトルド・クイケンなど）を擁していたベルギーのブリュッセル音楽院に留学して、その才能と志を開花させた。

今日、円熟の極みにある有田が満を持して録音したのが、日本コロムビアの古楽レーベル「アリアーレ」に録音、98年に発売されて話題を集めたアルバム『パンの笛／フルート、その音楽と楽器の400年の旅』のいわば統編となる『無伴奏フルートの世界／パンの笛400年の

『旅』である。オトテール・ロマン

の《プリユード》から旅を始める。S・パッハの名作《バルティータ》BWV1013を筆頭に、ルベル、クヴァンツ、オトテル、ブラヴェラを経て、自作の《羽高》武満の《エア》や、ドビュッシーの《シランクス》などを交えた16の無伴奏作品を、延べ17本のフラウト・トラヴェルソとモダン・フルートで吹き分けている。フルート音楽の400年の響きが堪能できる内容、熟練の職人技さへ超越したような技巧と精緻で豊潤な表現力を天空自在に発揮した演奏と、まさに有田の独壇場の共境が示されている。

②すでに熟成度の高い岡本侑也の無伴奏チェロ作品集

大ヴェテランの渾身のアルバムの次は、新進気鋭のデビュー・アルバム。2007年のエリーザベト王妃国際音楽コンクールで第2位の栄誉に輝いたチェロの岡本佑也（今年27歳）の『イン・コンサー

③アメリカ愛が全開の

原田慶太楼 & N響の初録音

次も「新進気鋭」といっても、すでにアメリカを中心に目覚ましい実績をあげ、最近になって日本での活動も本格化させている指揮者・原田慶太楼（今年36歳）が、昨年11月のN響のコンサートを指揮したプログラムを収録した最新録音盤。

④ 今回も感動的な小林研一郎の
のチャイコフスキー・ライヴ

アルバム・タイトルに「DANCE ON
(ダンスオン)」「キューバの舞曲」の一種
と付けられたように、バーンスタインの
《オン・ザ・タウン》からの《3つのダ
ンス・エピソード》、G・ウォーカーの《弦
楽のための叙情詩》、コーブランドのバ
レエ組曲《アバラチアの春》、メキシコ
のA・マルケスの《ダンスオン》第2番な
ど、長くアメリカで活躍してきた原田の
十八番の作品が演奏されている。アメリ
カン・クラシックへの限らない愛をダイ
ナミックに切れよく、時にノスタルジッ
クに表現する原田のタクトに俊敏に反応
したN響が、作品それぞれの魅力や面白
さを十全に表現しているのもさすがだ。

追悼 クリスタ・ルートヴィヒ
技巧派メゾ・ソプラノ歌手の先駆者

2021年4月2日、クリスタ・ルートヴィヒが93歳で世を去った。拔群の歌唱力で、メゾ・ソプラノ歌手として世界的なキャリアを積み、ソプラノのシヴアルツコップ、バリトンのF・ディースカウらとともに一時代を築いた。またベームをはじめ、カラヤンやバーンスタインら多くの巨匠たちに重用され、数多くの名演・名盤を残している。ここではドイツを代表する名歌手の業績を振り返る。

クリスタ・ルートヴィヒ死去
20世紀の大メゾ・ソプラノ歌手が去った

堀内修

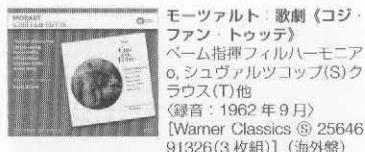
巧い歌手だった。群を抜いて巧いメゾ・ソプラノだった。巧すぎる歌手だったかもしれない。

クリスタ・ルートヴィヒは、現代の巧いメゾたちの先駆者だった。舌を巻く巧さこそメゾのスターの第一条件だという時代を、この20世紀の大メゾ・ソプラノは切り開いたのだ。

人々指揮者たちがこぞつてルートヴィヒを求めたのも無理はない。カラヤンもベームもバーンスタインも、肝心な時にただけではない。ベームはルートヴィヒのレオノーレを得て、自分の『フィデリオ』を作り出し、バーンスタインはマ



クリスタ・ルトヴィヒ
1928年ベルリン生まれ。フランクフルト音楽院に
学び、1946年《ウモリ》のオルゴフスキー役でデ
ビュー。54年、サルツブルク音楽祭で《マカロの
結婚》のケルビーノ役を歌い、一躍脚光を浴びる。
翌年からウィーン国立歌劇場に迎え入れられる。60年頃
からソプラノの役もレパートリーに加え、ドヴォを代
表する女性歌手の地位を確立した。93年に引退を
表明し、後進の育成にあたった。またオペラ、オ
ラトリオ、歌曲など数多くの録音を残した。



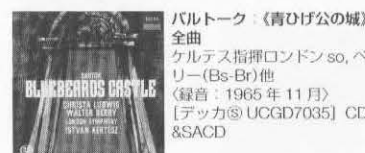
ベートーヴェンと不朽の名盤

不朽の名盤として、この機に改めて紹介。指揮者ベートーヴェンの卓越したテンポ採りによって、普段あまり聴き取れないような低弦の動きに心揺さぶられるなど、再発見は多いと思う。男声陣は遅く、姉役のシュヴァルツコップははやや年嵩に聴こえるが、その分、妹役のルートヴィヒの「好奇心旺盛な若い娘」像はよりはっきりと確立され、アンサンブルでは上品な運びも崩さない(第1幕の姉と哲学者との三重唱を代表格に)。その一方で、第1幕の急速かつ激情的なアリアでは、自身の普段の枠を超えるような直情的な歌い回しから、苦み交じりの声(歌い収めの一音)も示すなど、性格表現をいろいろ試して、多くの点で成功していることが窺える。また、レチターヴェーヴォ・セッコ(鍵盤楽器伴奏の朗唱部)の部分では、ルートヴィヒの多彩な表情付けもふんだんに楽しめる。



研究熱心さと役への共感

ルートヴィヒが時期目指したソプラノへの道のり、最も良い形で記録したライブ。役どころは染物師バラクの妻だが、第1幕後半の登場シーンでひととき明るい声を駆使して庶民性を打ち出し、続く乳母との対話では疲れ切った内面を曝け出すといった辺り、彼女の研究熱心な姿勢と、役柄への共感ぶりが読み取れて非常に面白い。なお、モノラルでもあり、管弦楽も含めた音響水準は当時のライブ録音の域を超えるものではないが、ルートヴィヒのみならず、皇后役のリザネクや乳母役のホフマンの個性も十分に聴きとれ、バラク役のペリーの「普通に居る中年男」の声の役作りも雄弁。また、カラヤン指揮のオーケストラと舞台の距離感が良いので、幻想的なシーン(第1幕大詰めなど)のアンサンブルも、音による場創設として高水準で成立している。



女性を生々しい「征服欲」

大歌手の知られざる横顔を覗く一組。ルートヴィヒの声の厚みや中低音域の濃さを通じて、女性の生々しい「征服欲」が強く聴きとれる。「青ひげ伝説」は多くの作曲家がオペラ化した。バルトークの本作では歌手は夫と新妻の二人のみになり(本盤では語り役の吟遊詩人の前口上はカット)、当時は実の夫婦であったペリーと一対一の共演盤である。本盤はハンガリー人ケルテスの貴重なオペラ録音でもあり(第3幕の扉の豊か音響効果に心癒れ、第4幕の扉では管楽器による音の開放感が著しい)、ハンガリー語のコーチもしっかり付いたとのこと。本作の一大特徴たる「同じ言葉も二度続けて歌う」際のフレーズの強調法も、名歌手二人から鮮明に聴きとれる。大詰め第7幕(公の前妻たちが登場)では声の演技がさらに白熱し、妻の絶望と夫の虚無感が耳を浸す。



普段は聴けない物憂げさ

作曲家没後百年の節目で、ルートヴィヒには珍しいフランスものも推奨。本盤はよく「ドイツ的」と言われるが、確かに、人によっては発音に訛りが生じ、フレーズ終わりをスバッと切るといった、歌いぶりに変に禁欲的な姿勢も見え隠れする。しかし、歌手としての役作りと歌い回しはそれぞれに豊か。ダリラの三大アリアでは、普段のルートヴィヒには聴けない「物憂げな感」が読み取れ、持ち前の柔らかい声質の美点も十分に聴きとれる。また、キングの引き締まった声も、男女の立場の悲しさの違いを露呈させるファクターとして効果的。なお、指揮のバターネの力量で、オーケストラがどこどころ、ドキッとさせる程の耽美的な味わいを発揮し(特に、第1幕結尾の20秒間や、CD2[7]の場面替えや[8]のバックカナルの中間部)、合唱団の精緻な描きも聴き応えある。



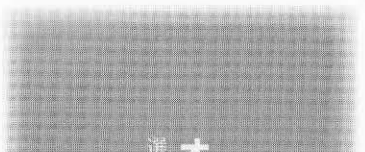
品の良い誇張的表現

オクタヴィアン役で出演。ルートヴィヒ初期のソースだけに、声に漲る若さと、後年よりは若干細めの響きを味わう一組になる。彼女は後年元帥夫人役も録音しており、こちらも温かみある声で健闘したが、今回はメゾ・ソプラノの本領発揮でこちらを選択。CD2[4]の(ばら献呈の二重唱)における柔和なフレーズ(低音域で声が幽かに揺れる箇所も、一つの性格表現に思えて興味深い)、CD2[10]のジュッティヒ＝ランダル(乙女ゾフィー役)との熱い対話も、青年貴族らしいしなやかさに満ちる。また、第3幕の喜劇的な声遣いも、品の良さを失わない誇張的表現を貫くので、男爵役のエーデルマンとのさらさらとしたやりとりが十分楽しめる。なお、本盤はリマスタリングもされており、夫人役の名花シュヴァルツコップも含めて、解釈に更なる潤いが出る。



歌いだしから耳を捉える

史上初の「指揮」スタジオ全曲録音という、記念碑樹立への高い貢献度も踏まえて選出。女神トリック役での出演は第2幕前半のみだが、歌いだしの雄たけびがまず耳を捉え、夫役のホルターの極めて人間くさい歌いぶり(神々の長も、一番弱いところを正面から衝かれるところなるかと思う)との相性も良い。というのも、ルートヴィヒの音が決して冷たくはないので、ある種の信念のもとに動いているという性格付けもよく聴きとれて、嫉妬による意図逆しの面が薄れるからである。なお、ニルソン(ブリュンヒルデ)への最後の捨て台詞の一言は、それまでとは違う硬直性を示し、繰り上げた解釈の具体例として興味深い。ちなみに、本盤の他のキャストも強力であることは言うまでもないが、ワグネルに後の大歌手が多く集う点も付記しておきたい。



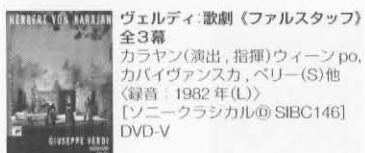
オペラの名演8選

選りし純粋



緩急の烈しさもたっぷり味わえる

ルートヴィヒ主演の《フィデリオ》には複数の音源があるが、ここでは日本との良き紐帯として、日生劇場開幕記念公演(1963年10月)のライブを推奨。メゾ・ソプラノの艶やかさを失わずにソプラノの音域までしなやかに歌い上げ、激情的なセリフ(第2幕)にも心を掴まれる。共演者も手堅く、番人ロッコ役グラインドルの楽天的な声、夫フロレスタン役のキングのバセティックな表情付け、敵役ビッパのナイトリンガーの声色の凄みに加えて、ベートーヴェンの棒(オペラでは本作が一番好きとのこと)：第2幕に「レオノーレ」序曲第3番を挿入)の緩急の烈しさもたっぷり味わえる。特に、夫婦の喜びの二重唱では、テンポの余りの猛攻ぶりに、ルートヴィヒもキングも卒倒寸前のフーリングに近づいているが、情景の飛び切りの熱さには、まさしく、心奪われる。



偉大なキャリアの象徴

ルートヴィヒのイタリアものでは最も成功した一組。彼女の朗らかな笑顔は、狂言回しのウィックル夫人役についたり、共演者勢も大ヴァテラン揃いなのと歌の応酬に十分な余裕があり、カラヤンの落ち着いた声も寄与して、言葉の届き具合が素晴らしい。特に、アリーチェ役のカバイヴァンスカとの細かい演技の積み重ね(第1幕)、主役のタディとのやりとりにおける、低音域の有名な一節の豊かな鳴らしぶり(第2幕)、フォード役のバネライと医師カウス役のデ・バルマの悪だくみを耳にして「そうはさせない!」と一入る際の鮮やかさ(第3幕前半)、そしてフィナーレのフーガでの爽やかな息遣い(第3幕後半)など、いずれも、ルートヴィヒの芸術性を最も素朴な形で示す名場面。カーテンコールで誰よりも早く退場できるのも、その偉大なキャリアの象徴である。

ラーの独唱者としてルートヴィヒを得て、ウィーンにおけるマラー評価に役立てた。マラーといえばカラヤンだったが、ルートヴィヒが歌った『大地の歌』が刺激となって、マラーの作品を取り上げたと思えるふしがある。『大地の歌』といえば、ルートヴィヒを独唱者にしてこの曲を録音したのは、カラヤンとバーンスタインだけじゃない。ふたりに先立ってオットー・クレンペラーが独唱者にルートヴィヒを選んでる。

クリスタ・ルートヴィヒは歌劇場の申し子のように生まれ育った。歌手の両親のもとで育ち、早くから歌と音楽の基礎を学んだだけでなく、環境がもうオペラだった。両親がアーヘンの歌劇場で歌っていたころ、新しく就任した若い音楽監督がウィーン風の食事目当てにたびたび家に訪れた。それがカラヤンで、後に一緒に仕事をすることになる。デビューしたのは1946年で、フランクフルト歌劇場で『こうもり』のオルロフスキーを歌っている。ウィーン国立歌劇場と契約したのが、戦争で破壊された劇場が再建された55年で、以後ルートヴィヒはウィーンの看板メゾ・ソプラノとして40年近く歌い続ける。だがウィーン登場の前年にザルツブルク音楽祭に、ウィーン登場と同じ『フィガロの結婚』のケルビーノとして

リトならフィッシュャー・ディースカウ、そしてメゾ・ソプラノはルートヴィヒという時代があった。ケルビーノ、オクタヴィアン、染物屋の妻にドラベツと、ルートヴィヒが成功を取めた役は数

派だけ、自分の記憶にある彼女の元帥夫人は違っている。きつと聴くこちらが若過ぎたのだらう。あのころ、もし自分がオクタヴィアンだったら、ためらわずゾフィーに走ったし、もしホセだったら

知らない。ドイツ系のオペラばかりじゃない。スカラ座でカラスのノルマと共演したルートヴィヒのアダージェの成功はいまも全曲盤で確かめられる。そしてブランゲネやフリッカなどワーグナーの作品でも、ルートヴィヒは第一人者だった。それらの定評ある役のほとんどを、直接聴けなかったのが残念だ。ウィーンの舞台で歌うルートヴィヒを聴くようになったのは70年代で、そのころは脇役でなく主役、メゾよりドラマティック・ソプラノの役を歌うようになっていたからだ。63年ベルリン・ドイツ・オペラ日本公演で歌ったのが『フィデリオ』のレオノーレだったが、ルートヴィヒはこれまでも成功を取っていたのだ。

69年ザルツブルク音楽祭の『ばらの騎士』全曲盤で聴くルートヴィヒの元帥夫人は立派だけれど、自分の記憶にある彼女の元帥夫人は違っている。きつと聴くこちらが若過ぎたのだらう。あのころ、もし自分がオクタヴィアンだったら、ためらわずゾフィーに走ったし、もしホセだったら

名歌手だ!と驚いたのはオペラでなくコンサートだった。コンツェルトハウスでバーンスタインがピアノを弾いてルートヴィヒが歌ったマラーの歌曲は、実に濃厚だった。ルートヴィヒの賛辞につきものの、深い声と深い表情という両方をこの時実感した。世界的評価に連れて、ウィーンが作曲家マラーの真価を認めるようになった時期だ。その動きの主役はバーンスタインだが、ルートヴィヒも間違いなく一枚噛んでいる。

ルートヴィヒの後、ドイツ系メゾ・ソプラノの系譜は、フアスベンダーやバルツァやマイヤーへと続いた。いまならガラランチャか。もうドイツ系なんて言っていないかもしれないが、それはルートヴィヒが踏みならした道だろう。そして後に続いたメゾたちの歌の巧さだって、先駆者あつてのものじゃないだろうか。これこそルートヴィヒの本領じゃないかと思えるのが『トリスタンとイゾルデ』のブランゲネだが、劇場では聴けなかった。カラヤンが72年と73年のザルツブルク音楽祭で行なった計5回の公演のうち2回でルートヴィヒはブランゲネを歌っている。2度も聴いたのに2度ともルートヴィヒではなかったのだ。亡くなったいま、深い声と卓越した技で描いたルートヴィヒの侍女の鑑を全曲盤で聴き直すことにしよう。

登場している。この時からウィーンの歌手、そして世界的歌手のキャリアが始まったわけだ。ソプラノならシュヴァルツコップ、バ

知れない。ドイツ系のオペラばかりじゃない。スカラ座でカラスのノルマと共演したルートヴィヒのアダージェの成功はいまも全曲盤で確かめられる。そしてブランゲネやフリッカなどワーグナーの作品でも、ルートヴィヒは第一人者だった。それらの定評ある役のほとんどを、直接聴けなかったのが残念だ。ウィーンの舞台で歌うルートヴィヒを聴くようになったのは70年代で、そのころは脇役でなく主役、メゾよりドラマティック・ソプラノの役を歌うようになっていたからだ。63年ベルリン・ドイツ・オペラ日本公演で歌ったのが『フィデリオ』のレオノーレだったが、ルートヴィヒはこれまでも成功を取っていたのだ。

名歌手だ!と驚いたのはオペラでなくコンサートだった。コンツェルトハウスでバーンスタインがピアノを弾いてルートヴィヒが歌ったマラーの歌曲は、実に濃厚だった。ルートヴィヒの賛辞につきものの、深い声と深い表情という両方をこの時実感した。世界的評価に連れて、ウィーンが作曲家マラーの真価を認めるようになった時期だ。その動きの主役はバーンスタインだが、ルートヴィヒも間違いなく一枚噛んでいる。

ルートヴィヒの後、ドイツ系メゾ・ソプラノの系譜は、フアスベンダーやバルツァやマイヤーへと続いた。いまならガラランチャか。もうドイツ系なんて言っていないかもしれないが、それはルートヴィヒが踏みならした道だろう。そして後に続いたメゾたちの歌の巧さだって、先駆者あつてのものじゃないだろうか。これこそルートヴィヒの本領じゃないかと思えるのが『トリスタンとイゾルデ』のブランゲネだが、劇場では聴けなかった。カラヤンが72年と73年のザルツブルク音楽祭で行なった計5回の公演のうち2回でルートヴィヒはブランゲネを歌っている。2度も聴いたのに2度ともルートヴィヒではなかったのだ。亡くなったいま、深い声と卓越した技で描いたルートヴィヒの侍女の鑑を全曲盤で聴き直すことにしよう。



『レコード芸術』執筆陣が選ぶ「思い出の1枚」

豊富な美声と豊かな陰影
ルートヴィヒは第二次大戦直後から1994年に引退するまで、オペラ、リット、コンサートなど非常に広範囲に渡って約半世紀も活躍した稀有な名歌手である。また1960年代から70年代にかけては『フィデリオ』のレオノーレや『ばらの騎士』のマルシャリンに代表されるソプラノ役でも名演を残した。とくに忘れ難いのは63年に初来日した時のベーム指揮の『フィデリオ』や、カラスと共演した『ノルマ』のアダルジーサ。またリット作品の録音にも、シュベルトやマラーから、最後のリサイタルまで名盤が多いが、個人的な「思い出の1枚」としては『サムソンとダリラ』を挙げたい。この録音の発売当時「ルートヴィヒがダリラ？」と驚いたものだが、豊富な美声と豊かな陰影をたたえた官能的な表現もすばらしい名演で、共演者と指揮も充実した代表的な名盤である。



サン＝サーンス：戯劇《サムソンとダリラ》
全曲
ジュゼッペ・パターネ指揮ミュンヘン放送
o、バイエルン放送 cho、ジェイムズ・
キング(T)ベルント・ヴァイクル(Br)他
〈録音：1973年6月〉
[デンオン] CCCC84511 ~ 2(2枚組)]

●浅里公三・選



ヴェルディ：レクイエム、他
カルロ・マリア・ジュリーニ指揮フィル
ハーモニア o、フィルハーモニア cho、エ
リーザベト・シュヴァルツコップ(S)他
〈録音：1963年9月、1964年4月〉
[ワーナー・クラシックス] WPCS13345
~ 6(2枚組)] CD&SACD

●小畑恒夫・選

演奏が放つ深い精神性
私が東京の大学に入学して一人暮らしを始めた頃、ヴェルディ『レクイエム』を聞きたくて最初に買ったのがこれ。もう50年ほど前の話だ。その後カラヤン盤、アバド盤など感銘を受けた録音は山ほどあるのに、いまだにこの演奏に戻ってくるのはどういうわけか。古い録音だからCDになっても多少音質に問題はあろう。しかしこの演奏が放つ深い精神性を越えるものはないように思う。この録音でジュリーニが得た理想的なソリストたちの一人がルートヴィヒだった。彼女は後年さまざまな名盤を残すことになるが、30代半ばで早くもこの完成した歌唱！シュヴァルツコップと絶妙の調和を聞かせる「思い出の1枚」などなど、オペラの華美な華美と感情過多とは一線を画す端然たる歌唱が、これほど大きな感動を生み出すとは。

温かく心のこもった気高い歌唱
タリスタ・ルートヴィヒが93歳で亡くなった。メゾ・ソプラノ歌手の中では、特に独逸系作品において並ぶものがない存在として、ベームやクレンペラー、カラヤン、バーンスタインなど多くの大指揮者たちから重用された。残念ながら私はその美演を耳にできなかったのだが、録音では最も好きな歌手の一人だった。思い出の1枚といわれても、余りに優れたものが多過ぎるが、どうしても忘れることができないのがクレンペラーと共演したこのワーグナー、ブラームス、マラーの管弦楽付き作品を収めた1枚である。クレンペラーの堂々とした管弦楽演奏に乗って歌われるルートヴィヒの温かく心のこもった気高い歌唱は、各作品の内実を完璧に引き出し、聴く者の心を大きく揺さぶるには惜かない。彼女の最も得意な作曲家を集めている点でも忘れられない1枚である。

自分が主体となる表現への意志
ルートヴィヒが活躍していた最後の時期にオペラに目覚めたため、フリッツ・カヤクリテムネストラなど、この大歌手の声と演技で脳内に刷り込まれた作品は数限りない。だが、他の歌手の歌と比べると、悲しさを微塵も感じさせない「リマドンナ」としての華やかさと風格、メゾ・ソプラノらしい温かき人間味の融合した唯一無二の味わいである。あらゆる意味で「完璧な歌手」であったルートヴィヒはどんな歌手だったかを百の言葉で語るよりも、この録音での現役最後の歌唱の優しさ、暖かさ、穏やかさ、明るさは、より確かに理解させてくれる。



マラー：大地の歌
ヘルムート・フォン・カラヤン指揮ベル
リン po、ルネ・コロ(T)
〈録音：1973年〉
[グラモフォン] UCCG5221]

●広瀬大介・選



深々とした人間味に満ちた名唱

メゾ・ソプラノであるルートヴィヒは、リマドンナとして君臨する歌手ではなかったが、「ワーグナー歌手」の称号を与えられるべき存在でもあった。ヴェーナス、オルトルト、ブランゲネ、フリック、ヴァルトラウ、クンドリーといった役柄のそれぞれで名唱を残しているが、そんなワーグナー歌手「ルートヴィヒの歌う『ヴェーゼンドク』の歌」は、巨匠クレンペラーの指揮に支えられて深々とした人間味に満ちた名唱である。滋味に溢れたルートヴィヒのアプローチは一見地味だが、その味わい深さは聴くほどに聴き手の心に染み込んでくる。同じくクレンペラーと組んだブラームスの《アルト・ラプソディ》もルートヴィヒの人間性が偲ばれるような味わい深さを湛えている。《アルト・ラプソディ》では、後年のベームとの円熟の歌唱も忘れ難い。



マラー：亡き児をしのぶ歌、
リュッケルトによる5つの詩
カラヤン指揮ベルリン po
〈録音：1974年5月〉
[グラモフォン] UCCG493
7]

包容力の大きく深い歌

ルートヴィヒの包容力の大きく深い歌は、オーケストラとの歌唱で一層魅力が放たれていた。アーヘン歌劇場の音楽監督をしていた若き日のカラヤンは、その劇場の歌手であったルートヴィヒの両親と親交があり、幼いルートヴィヒがそこにいた。そんな古い付き合いのカラヤンとルートヴィヒの共演盤は数多いが、このマラーの2曲は、恐らくルートヴィヒの方が「音楽的先輩」にあたる数少ないレパートリーだろう。マラーはカラヤンの「後発」のレパートリーだが、興味深いことにルートヴィヒのマラー演奏の「同志」であったバーンスタインとはこの2曲の録音はない。普段のルートヴィヒの歌いぶりの「節度」は保ちつつも、音楽的インシアティヴはルートヴィヒが握っている。女声よるこの曲の人間味溢れる名演。



ウィーン・ラスト・ライブ
1994
スペンサー(p)
〈録音：1994年4月(L)〉
[RCA] BVCC678]

どんな歌手だったかを理解できる

最後は、やはりこのウィーンでの「告別コンサート」のライブ録音を選ぼう。93年に舞台からの引退を宣言したこの世紀の名歌手は、それから1年を掛けて世界中で「お別れコンサート」を行なった。東京でのその舞台は終生忘れ得ぬ幸せな記憶として筆者の心に刻まれている。そんな東京での選曲とは異なるこのアルバムだが、記憶と重なるのは「告別」の寂しさ、悲しさを微塵も感じさせない「リマドンナ」としての華やかさと風格、メゾ・ソプラノらしい温かき人間味の融合した唯一無二の味わいである。あらゆる意味で「完璧な歌手」であったルートヴィヒはどんな歌手だったかを百の言葉で語るよりも、この録音での現役最後の歌唱の優しさ、暖かさ、穏やかさ、明るさは、より確かに理解させてくれる。



ブラームス：歌曲集
バーンスタイン(p)
〈録音：1972年5月(L)〉
[ソニー・クラシカル] SICC1
420]

心躍る必聴の名盤

1972年5月2日、ウィーン・コンツェルトハウスでのライブ録音。バーンスタインの絶妙な「煽り」を受けて、ルートヴィヒは常の節度を踏み越えた振り幅の大きな歌唱表現を見せている。リット伴奏ピアノとひと味もふた味も違うバーンスタインの積極性に煽られながらも、それに共振しつつ決して節度と品格を失わないルートヴィヒの懐の深さは、リット歌唱という「小宇宙」の奥深さを感得させてくれる。歌手とピアニストという人間同士の精神のぶつかり合いと対話の「化学反応」の妙を満喫できるのだ。カラヤンとバーンスタインという両名匠から愛されたルートヴィヒの独自の許容力の大きさを改めて思う。プログラミンのセンスの良さも特筆すべきもので、久し振りに試聴して心躍る思いがした。ブラームスを愛する聴き手必聴の名盤だ。



マラー：歌曲集《子供の魔法の角笛》全曲
バーンスタイン(p, 指揮)
ニューヨーク po、ベリー(Br)
他
〈録音：1967 ~ 1969年(一部L)〉
[ソニー・クラシカル] SICC1
528 ~ 9(2枚組)]

絶品のコメディエンヌぶり

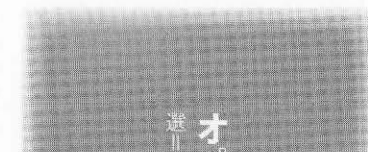
1967年、バーンスタインとルートヴィヒ、そして当時ルートヴィヒの夫君であったウィーンの名バリトン、フルター・ペリーはニューヨーク・フィルと「子供の魔法の角笛」を録音する。その翌年、バーンスタインとこの夫妻はウィーン国立歌劇場での『ばらの騎士』で大成功を収める。同時期の4月24日、ウィーン・コンツェルトハウスでのリサイタルがあるはずのF=ディースカウが公演をキャンセルする事件が起こった。急遽、ルートヴィヒとペリーにバーンスタインのピアノで『子供の魔法の角笛』でのリサイタルが代替公演として行なわれ大成功を収めた。更に69年にオーケストラ版の収録が完成し、レコード発売時にはボーナス・レコードとして件のライブ録音が付けられた。夫妻の掛け合いの妙、更にルートヴィヒのコメディエンヌぶりは絶品。



J.S. バッハ：マタイ受難曲
BWV.244
クレンペラー指揮フィルハー
モニア o、シュヴァルツコッ
プ(S)他
〈録音：1960年 ~ 1961年〉
[ワーナー・クラシックス] WPCS13138 ~ 40(3枚組)]

いぶし銀の輝きを放つ

ルートヴィヒは巨匠に愛された名歌手だった。バッハの《マタイ受難曲》もこのクレンペラーとの60年から61年にかけての録音の後、カラヤンとも録音している。この両者は改めて言うまでもないが、昨今のピリオド楽器による演奏ではなく、モダン・オーケストラとの極めてロマンティックでダイナミックなアプローチである。数多ある《マタイ受難曲》の録音の中でも最も気宇雄大で蕩々たる音楽運びのクレンペラーの解釈を真っ向から受け止めて深々とした歌唱を繰り広げるルートヴィヒの力量に、改めて今回気付かされた。この録音はEMIの辣腕プロデューサーであったW.レグの手にするものだけに、老巨匠クレンペラーに相応しい粒選りの歌手を揃えたものだが、そのきら星の如き名手の中でも、ルートヴィヒはいぶし銀の輝きを放っている。



オペラ以外の名演8選

選1 国土潤一
シューベルト：歌曲集《冬の旅》
レヴァイン(p)
〈録音：1986年12月〉
[グラモフォン] F32G5052
8(廃盤)]



人間性を感じる温かい名唱

ルートヴィヒという芸術家でも声楽家でもあらゆる面で高次元にあった(それゆえにしばしば「凄さ」を見落としていたかもしれない) 歌手の存在を思う時に筆者は真っ先に思い浮かべるアルバムは、86年に録音されたシューベルトの《冬の旅》である。80年代以降、ブリギッテ・ファスベンダーを皮切りに多くの女声歌手がこの男性用の歌曲集に挑んできた。スズン役をオペラで歌うメゾ・ソプラノを始め多くの女声歌手が、それぞれのアプローチを展開してきた。それらは男声歌手である筆者にとって大いに興味をそそられ、参考になるものでもあった。その中でも、このルートヴィヒの穏やかである意味優しいアプローチは「Es war einmal (昔々……)」というような語りかけのように感じられた。語り部のルートヴィヒの人間性を感じるような温かい名唱だ。



心に染みる滋味に富んだ歌唱

筆者をはじめ多くの聴き手にとってルートヴィヒの名前と切っても切り離せないのはマラーであろう。人々がマラーの音楽を受容し始めた当時(それはほんの半世紀ちょっと前のことだった)、F=ディースカウと並んでルートヴィヒの名前がそこにあった。筆者が初めて買ったルートヴィヒのマラーのレコードが、このクレンペラーとの《大地の歌》だった。最初はクレンペラーと天折した不世出の名テノール、フリッツ・ヴァンダーリッヒの方が目当てだった。ヴァンダーリッヒも素敵だったが、聴けば聴くほどにルートヴィヒの滋味に富んだ歌唱の深みは心に染み込んだ。第6楽章の《告別》に至るまで、クレンペラーの練達の音楽作りに相まって、その感銘の大きさは比類がない。ルートヴィヒはバーンスタイン、カラヤンとも名唱を録音で残している。